

母性・小児・地域看護領域の合同授業の試み （第2報）

黒野 智子* 埴田奈津子* 宮谷 恵*
入江 晶子* 小出扶美子**

聖隷クリストファー大学看護学部*
聖隷クリストファー大学看護学部非常勤**

The Challenge of Teaching a Combined Class of Maternity, Child, and Community Health Nursing Class (Report 2)

Tomoko KURONO Natsuko TADA Megumi MIYATANI
Shoko IRIE Fumiko KOIDE

Seirei Christopher College, Department of Nursing

抄 録

本学の3年次生を対象に、異なる看護学領域の関連性の認識と知識の統合を図るため、母性・小児・地域看護の合同授業を昨年度より試み、その有効性の示唆を得た。今年度は授業の方法をさらに工夫して実施した。その結果、授業前後で3領域の関連性の認識は有意に上昇した。しかし知識の統合については、平均得点は上昇したが統計的には有意差が見られなかった。この原因は授業内容の濃密さが考えられ、今後の検討を要した。

キーワード：合同授業、領域間の知識の統合、母性・小児・地域看護学、双胎の育児支援

I. はじめに

昨年度我々は本学の3年次生を対象に、異なる看護学領域の関連性の認識と知識の統合を図るため、正常新生児と低出生体重児を持つ母親それぞれへの育児支援、および児童虐待の早期発見とその対応について、母性・小児・地域看護領域の3名の教員が同じ授業時間の中で、それぞれの看護領域の視点で関わる合同授業を試みた。そしてその結果、学生の母性・小児・地域看護学領域の関連性の認識は授業の前後で有意差が認められ、新しく試みた授業の有効性が示唆された。¹⁾

今年度は昨年度の内容を一部変更し、昨年とりあげた低出生体重児に代えて、最近の不妊治療の影響で増加傾向にある²⁾ 双胎の児を持つ母親の育児支援について採り上げた。そして学生が母性・小児・地域看護を関連付けて考え、3領域の知識を統合できるよう促すことを目的に、合同授業の内容をさらに工夫し実施した。そこで学生の認識の変化と理解度の変化から、今年度の合同授業の教育効果を分析したので以下に

報告する。

II. 合同授業について

1. 今回の授業のテーマに採り上げた「育児支援」、「双胎」、「児童虐待」についての合同授業までの学生の準備性

本学の看護領域を中心としたカリキュラムの構造は、図1に示す通りである。看護および社会福祉の基礎技術として、2年次に「保健指導方法論 I・II」「地域看護活動論 I・II」3年次に「家族援助論」があり、そして領域・対象別看護方法論が3年次に組まれている。

「保健指導方法論 I・II」は、学生の理解を深めるために既存の科目の関連した内容を統合して1つの科目として構成したもの³⁾ である。従って今回合同授業に関わっている母性・小児・地域看護領域の教員と、精神や老人看護領域の教員が関わり、学生は保健指導・健康教育の概念・方法の基礎的な知識と、それらの基礎となる人々のとる保健行動の概要や、乳幼児期から高齢期までのライフサイクルや健康問題に

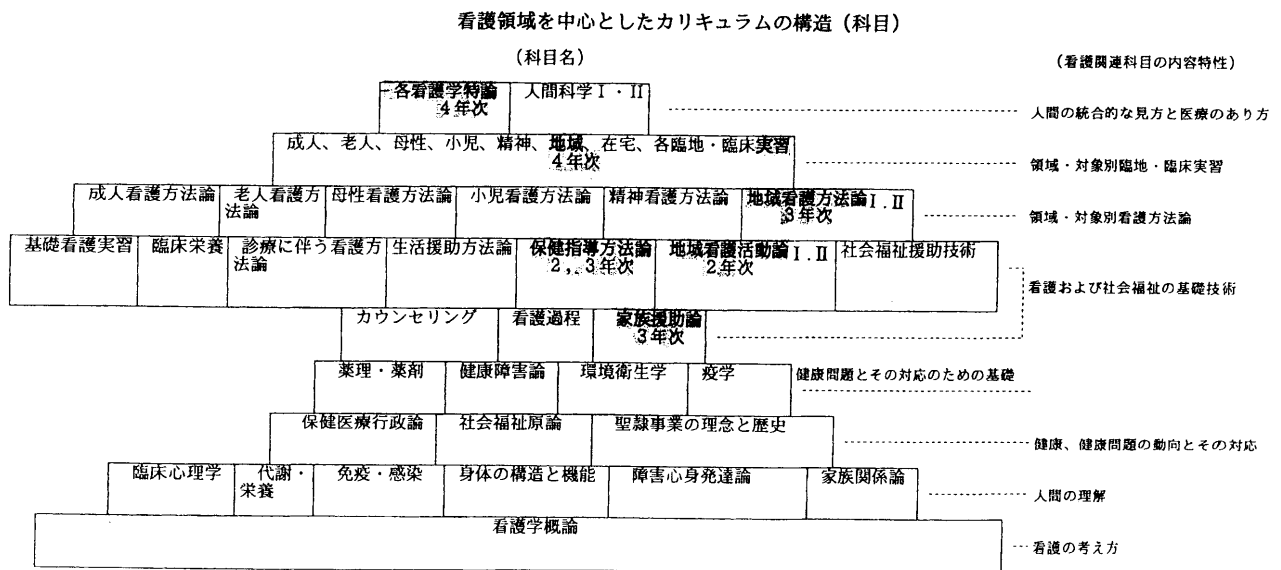


図1 カリキュラムの構造

応じた保健指導の各論について学んでいる。

今回テーマとして採り上げた「育児支援」「双胎」「児童虐待」に関して、母性・小児・地域の3領域でそれぞれ行っている授業内容は以下の通りである。

1) 母性看護領域が関わる教育内容

①「育児支援」について

「母性看護方法論Ⅰ」（2年次後期）では、育児を支援する法律（母子保健法、男女平等雇用機会均等法など）、母子保健統計、妊娠・分娩・子育てに伴う女性の心理・社会的変化とその援助、母子保健システムについて学んでいる。

「母性看護方法論Ⅱ」（3年次通年）では、妊娠・分娩・産褥期の妊産婦の心身および日常生活の変化、夫や家族のサポートなどについて、実際の妊産婦の事例を用いてリアルタイムに妊娠経過を追いながら、ビデオインタビューや実際に妊産婦本人に授業に参加してもらうなど、学生が妊産婦についてイメージ化し理解を深める工夫を行っている。また退院後の新生児のいる生活については、学生は地域の開業助産師から家庭での褥婦の具体的な生活や、育児についての不安などについて学ぶと共に、妊娠中から経過を追ってきた褥婦と新生児に授業に参加してもらい、家庭での生活状況や新生児の成長や変化について学んでいる。そして今年度は、昨年度の合同授業で使用した一般的な母子の医療・保健サービスの一覧のプリントを配布し、母性・小児・地域看護が関連していることが資料からわかるようにした。

②「双胎」について

「母性看護方法論Ⅰ」（2年次後期）の母子保健に関する法律の中で、双胎（多胎）に関する項目についても学んでいる。

「母性看護方法論Ⅱ」（3年次通年）では、「危険な出来事！妊娠・分娩編」で、妊娠中毒症・切迫早産とともに双胎妊産婦の心身と日常生活の変化やそのリスクについて学んでいる。今年度は双胎の児を持つ母親にビデオインタビューをおこない、双胎の妊娠・分娩がイメージできるように学生に2事例を提示した。

③「児童虐待」について

「保健指導方法論Ⅰ」（2年次後期）では、医療職者とセクシュアリティに関する講義の中で、児童虐待防止法の存在は学んでいる。しかしその他は、「母性看護方法論Ⅱ」（3年次通年）で産褥期のマタニティーブルーや育児不安に関連して少し学んでいる程度である。

2) 小児看護領域が関わる教育内容

「保健指導方法論Ⅱ」（3年次前期）では、まず授業の最初に小児の成長発達について学生がグループワークを行っており、以前に心身生涯発達論などで習った小児の身体面・精神面の成長発達の知識を確認している。次に小児各期の栄養とその指導のところで母乳・ミルクや離乳食について学び、市販の離乳食の試食を行っている。その後予防接種についてと、0歳からの事故予防と安全教育、0歳からの健康審査と保健指導について学んでおり、以上のような範囲が母性・地域などの他領域や育児支援に関連した内容となっている。

「小児看護方法論」（3年次通年）では、小児の症状の観察と看護のところで、小児によくある病状（発熱、嘔吐など）とその対症看護を学んでいる。他には技術演習で乳児のバイタルサインの測定、清拭と臀部浴を行っている。また学生によるグループワークで広く小児の発達、育児に必要な項目（食事・排泄・清潔・移動の方法、予防接種、事故防止、育児サポート体制

など)について調べて発表するという演習を行っており、育児支援に関連した内容を学んでいる。

「双胎」「児童虐待」については、ほとんど触れていない。

3) 地域看護学領域が関わる教育内容

「地域看護活動論Ⅰ」(2年次前期)では、地域における母子保健活動の概要を学んでいる。

「保健指導方法論Ⅰ」(2年次後期)では、ライフサイクルに応じた保健体制と保健指導の中で、母子保健分野における母子保健指標の動向と児童福祉法・母子保健法等に基づいた母子保健体制について学び、それらを基に、必要とされる母子保健指導の概要について学んでいる。

「家族援助論」(3年次前期)では、家族の健康問題のアセスメントと支援の方法を学ぶことを目的として、乳幼児とその家族への援助をテーマに事例展開の演習を行なっている。

「地域看護方法論Ⅰ」(3年次通年)の後期では、上記の科目を基盤として、“新生児家庭訪問”の演習と“低体重児・乳幼児・妊産婦及び家族への援助”をテーマとした事例展開の演習と事例発表を行なっている。

「地域看護方法論Ⅱ」(3年次通年)では「地域看護方法論Ⅰ」と平行して、地区組織活動や地区診断の項目の中で、母子に関係する地区組織活動や地区診断について取り上げ、演習の中で4年次の臨地実習と連動した実習市町村の活動実態の把握を行なっている。

「双胎」「児童虐待」については育児支援のトピックスとして、簡単に触れているのみである。

2. 合同授業の実際

今年度は、①正常新生児を持つ母親の育児支

援、②双胎の児を持つ母親の育児支援、③児童虐待の早期発見とその対応について採り上げることとし、学生が母性・小児・地域看護を関連付けて考え、3領域の知識を統合できるよう促すことを目的とした。これらの3つのテーマについてそれぞれの領域の教授内容について話し合いを持ち、各領域が取り扱っている関連する事柄を確認した上で、合同授業の方法について検討を行った。今年度は、「①正常新生児を持つ母親の育児支援」に関しては、「母性看護方法論Ⅱ」の授業の中で、リアルタイムに妊娠・分娩・産褥期の経過を追っていた事例を採り上げ、その母親に授業に参加してもらった。「②双胎の児を持つ母親の育児支援」についての2事例は、合同授業の1週間前の「母性看護方法論Ⅱ」の授業の中で採り上げた事例を用いた。

実際の授業は2002年11月22日のⅢ・Ⅳ時限目の「母性看護方法論Ⅱ」授業の中で行った。最初にテーマの①と②の看護援助について、母子二組(一組は正常に生まれた5ヶ月児の母親のみ、もう一組は双胎で生まれた1歳児2人とその母親)に出演してもらい、妊娠・出産・産褥から育児に至る経過と受けた看護援助の実際、およびその時々気持ちについて、母性の教員がインタビューを行った。さらに、双胎の事例については、別の1ヶ月児の事例をビデオに撮影したものを学生に見せた。そして同時に、小児・地域の教員が交代で母子への保健・医療・福祉サービスや看護援助について、それぞれに関わりのある部分を解説した

次に③の児童虐待については、被虐待児をめぐる関係機関の役割について、3領域の教員が交代にそれぞれに関わりのある部分を解説した。学生には被虐待児をめぐる関係諸機関の役割を図示したものと、虐待の可能性を発見するため

のポイントを挙げた資料に加えて、実際の健診場面で虐待の疑いのある、気になる母児の様子と、その事例についてのカンファレンス場面を撮影したビデオを見せた。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

本学の2002年度の3年次生121名。そのうち、男子学生は7名、女子学生は114名であった。出産・育児経験のある学生はいなかった。

2. 調査方法

合同授業の1週間前（以下1回目とする）、合同授業直後（以下2回目とする）、および合同授業実施より18日後（以下3回目とする）の計3回にわたり、対象の学生に質問紙調査を実施した。

1) 調査内容

以下の4項目について質問紙調査を行なった。

①母性・小児・地域看護学の関連性の認識：

今までの授業を通して学生が感じている母性・小児・地域看護学領域の関連性の認識の程度をVisual Analog Scaleに記入してもらった。

②関連性を認識した授業内容や場面：

1回目の調査では、母性・小児・地域看護学の関連性を認識した合同授業前までの授業や実習内容や場面、2回目の調査では今回の合同授業で関連性を認識した内容や場面について自由記載方法で記述してもらった。

③経時的な母子の保健・医療・福祉サービスの理解：

事例を提示し、妊娠期、産褥入院期、退院時のそれぞれの時期に行われている具体的な看護援助や健康教育などの育児支援について記載してもらった。

④合同授業についての感想：

2回目の調査では、合同授業の感想を自由記載方法で記述してもらった。

2) 調査期間

1回目：合同授業実施1週間前の2002年11月15日の母性看護方法論Ⅱの授業開始直後に実施。

2回目：2002年11月22日の合同授業終了直後で母性看護方法論Ⅱの授業時間内に実施。

3回目：合同授業を実施した18日後の2002年12月9日、3年次生が全員参加する小児看護実習学内演習オリエンテーション時に実施。

3) 倫理的配慮

質問紙は無記名とし、学生には研究の主旨を文書と口頭で説明し、成績に関係しないことを約束した上で教員が退席した後に調査票に記載し、回収箱に入れてもらった。

3. 分析方法

1) 母性・小児・地域看護学の関連性の認識： （以下関連性の認識とする）

1回目～3回目の調査ごとにVisual Analog Scaleを計測し、それぞれの記述統計量を算出し、3回の平均値の差を対応のある一元配置分散分析により有意差の検定を行った。

2) 関連性を認識した授業内容や場面：

1回目と2回目の質問紙に自由記載で記述してもらった、合同授業前と授業後の母性・小児・地域看護の関連性を認識した授業場面や内容の記述を分類・集計し分析した。

3) 経時的な母子の保健・医療・福祉サービスの理解：

妊娠期、産褥入院期、退院時のそれぞれの時

期に行われている具体的な看護援助や健康教育などの育児支援についての学生の記載内容を、正しいものを1個1点で点数化してそれぞれの記述統計量を算出し、3回の平均値の差を対応のある一元配置分散分析により有意差の検定を行った。

4) 合同授業の感想：

合同授業の感想を2回目の質問紙に自由記載で記述してもらい、分類・集計し分析した。

尚関連性の認識と経時的な母子の保健・医療・福祉サービスの理解のデータ分析にあたっては、統計パッケージSPSS10.1JAdvanced Modelsを使用した。

IV. 調査結果

1. 回収率

質問紙の回収数と回収率は、1回目78例64.5%、2回目83例68.6%、3回目84例69.4%であった。なお分析にあたっては、回収された中の無効回答を除去し、「関連性の認識」では76例、「経時的な母子の医療・保健サービスの理解」では、78例を分析対象とした。

2. 記述統計量

1) 関連性の認識

Visual Analog Scale計測値の平均は、1回目7.742、2回目9.132、3回目8.795であった(表1)。

表1 「関連性の認識」の記述統計量

	平均値	標準偏差	N
1回目	7.742	1.436	76
2回目	9.132	1.120	76
3回目	8.795	1.463	76

2) 関連性を認識した授業内容や場面

①1回目の調査では、複数回答を含む総回答数

表2 合同授業以前で学生が3領域に関連性があると感じたこと(1回目調査から)

回答内容	回答数
技術演習	42(40.4%)
家庭訪問の演習	18(17.3%)
授業内容	17(16.3%)
共通または連続している対象や援助内容	15(14.4%)
関連する法律が共通	6(5.8%)
関連性はない	5(4.8%)
その他	1(1.0%)

(総回答数104、複数回答あり)

が104あった。その結果(表2)を見てみると、42名(総回答数の40.4%)が母性、小児、地域看護学の授業でおこなった児の身体計測、沐浴・清潔、バイタルサインの測定など「技術援助の演習場面で各看護領域の関連性を認識した」と答えている。また、地域看護学で行った乳幼児家庭訪問と答えた学生は、18名(総回答数の17.3%)で「母性は妊産婦の側から、小児は乳児～子どもの側から主に学び、地域の新生児家庭訪問の演習をした際に母性・小児の知識が必要なので」などのような記載があった。

「授業内容で関連性を認識した」と答えた学生は17名(総回答数の16.3%)で、「配布資料の内容が共通している」、「小児・母性のビデオの内容から」と答えていた。「母親と子供、低出生体重児など母性と小児・地域看護学の対象者について、関わる時期が異なるが共通もしくは共通の援助内容でつながっている」と答えた学生は15名(総回答数の14.4%)であった。

一方、「関連性は感じない」と答えた学生は5名で、「アプローチの方法が違うと別の物のように感じる」、「授業では感じなかったが保健師さんの話で感じた」「母性・小児は関連しているが、地域とはかけ離れている」などの記載があった。

②合同授業実施直後の2回目の調査

複数回答を含む総回答数は、120あった。その

表3 合同授業の中で学生が3領域に関連性があると感じたこと(2回目調査から)

回答内容	回答数
共通の対象に関わっている	40(33.3%)
援助内容が連携し相補的	32(26.7%)
3領域の教員が同時に授業(授業方法)	31(25.8%)
全て	10(8.3%)
その他	7(5.8%)

(総回答数120、複数回答あり)

結果(表3)を見てみると3領域が共通の対象に関わっていると答えたものは40名(総回答数の33.3%)で、また3領域の援助内容が連携し相補的であると答えている学生は32名(総回答数の26.7%)いた。母性・小児・地域看護領域の教員が同じ授業に参加しそれぞれの視点や立場から講義をするという「授業方法によって3領域の関連性を認識した」と答えたものは31名(総回答数の25.8%)であった。また、「今日の授業を受けて」「今日の全て」と答えた学生も10名(総回答数の8.3%)いた。

一方、「関連性はない」と答えた学生はいなかった。

3) 経時的な母子の保健・医療・福祉サービスの理解について

妊娠期、産褥入院期、退院時のそれぞれの時期に行われている具体的な看護援助や健康教育などの育児支援についての学生の記載内容の平均得点は、1回目7.29、2回目8.42、3回目8.59であった(表4)。

表4 「経時的な母子の医療・保険サービス」の記述統計量

	平均値	標準偏差	N
1回目	7.29	3.60	78
2回目	8.42	4.81	78
3回目	8.59	4.35	78

4) 合同授業の感想

合同授業の感想の記述を分類すると、回答が

あったのは83名中74名で「3つの領域の関連性がとてもよくわかりおもしろかった」というポジティブな感想が22名(30.1%)、「とてもよく理解できたが内容が濃すぎて非常に疲れた」という感想が18名(24.7%)、「疲れた、2コマでできる内容ではないと思う」と言ったネガティブな感想が18名(24.7%)、「双子がとても可愛く、お母さんの話を聞いてよかった」などの妊産婦と児の参加に対するポジティブな感想やその他の意見16名(21.6%)に分類できた(表5)。

表5 合同授業の感想(2回目調査から)

回答内容	回答数
3つの領域の関連性がとてもよくわかった	22(30.1%)
とてもよく理解できたが内容多すぎて混乱	18(24.7%)
内容が多くて疲れた・混乱した	18(24.7%)
妊産婦と児の参加に対するポジティブな感想	11(15.1%)
その他	5(6.0%)

(n=74、複数回答なし)

3. 対応のある一元配置分散分析結果

1) 関連性の認識：

3回のVisual Analog Scale計測値の平均値について、対応のある一元配置分散分析により有意差の検定を行った結果(表6)、有意確率1%水準以下で有意差が認められ、合同授業を行なうことで関連性の認識が高められたと考える。この結果をもとに、多重比較(表7)を行なった結果、1回目と2回目、及び1回目と3回目では有意確率1%水準以下で有意差が認められた。しかし、2回目と3回目では有意確率0.142で有意差が認められなかった。

2) 経時的な母子の保健・医療・福祉サービスの理解：

学生の記載内容の平均得点は1回目7.29、2回目8.42と合同授業の前後で平均得点の上昇はみられたが、統計的な有意差は認められなかった(表8)。

表6 「関連性の認識」被験者内効果の検定

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
関連性	79.854	2	39.927	20.531	0.000
誤差	261.713	150	1.945		

球面性の仮定

表7 「関連性の認識」多重比較

(I)関連性	(J)関連性	平均値の差(I-J)	標準誤差	有意確率	差の95%信頼区間 下限	上限
1回目	2回目	-1.389	0.201	0.000	-1.789	-0.990
	3回目	-1.083	0.248	0.000	-1.547	-0.558
2回目	1回目	1.389	0.201	0.000	0.990	1.789
	3回目	0.337	0.227	0.142	-0.115	0.789
3回目	1回目	1.053	0.248	0.000	0.558	1.547
	2回目	-0.337	0.227	0.142	-0.789	0.115

推定周辺平均に基づいた

* 平均値の差は.05水準で有意です。

a 多重比較の調整：最小有意差(調整無しに等しい)

表8 「経時的な母子の保護・医療・福祉サービスの理解」被験者内効果の検定

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
知識	77.410	2	38.705	2.220	0.112
誤差	2684.590	154	17.432		

球面性の仮定

V. 考察

今回我々は昨年度に引き続き母性・小児・地域看護の連携を図り、合同授業を実施した。その結果、各領域の関連性の認識についての変化を測定するVisual Analog Scaleの結果から、合同授業を実施したことにより、学生の母性・小児・地域看護学領域の関連性への認識は高まったと言える。学生がその関連性をどこで感じたかをみたとこ、合同授業実施前は援助技術演習の内容について、3つの看護領域に関連性を感じていたという回答が最も多かった。ここで言う援助技術とは、児の身体計測、沐浴・清潔、バイタルサインの測定などの基礎看護技術であり、1、2年次で学んだ生活援助方法論が全ての看護領域に共通する技術であることを学んでい

る学生にとっては、関連付けやすかったのではないかと考える。地域看護学で行った乳幼児家庭訪問は17名の学生が関連していると感じたと答えているが、この演習は、対人関係を含む多様な基礎看護技術と母性・小児・地域看護学の知識を統合する演習であり、今後の合同授業を更に工夫する際のヒントにもなるのではないかと考える。

一方、合同授業前には「関連性を感じない」「特に母性と地域は無関係」と答えた学生も5名いた。しかし、合同授業後の2回目の記載には、「関連性はない」と答えた学生はおらず、3領域の教員が同じ授業に参加しそれぞれの異なる視点で共通のテーマについて講義するという授業方法によって関連性を認識したと答えたものが31名おり、合同授業のような授業の取り組みは

必要であり、有効であったと言えるのではないかと思われる。

前回は授業後の学生の知識が定着したとは言えなかったため、今年度は知識の定着を図るために更なる工夫を加えた。その結果、知識が統合されたかどうかを測る経時的な母子の保健・医療・福祉サービスについての質問紙調査では、実施前と比較して、合同授業実施直後、18日後いずれも平均得点は上昇した。特に実施直後は実施前と比較して平均得点は1.13上昇がみられた。しかし、統計的には実施直後も18日後も、実施前と比べて有意差は見られなかった。その理由の1つには、授業のテーマが3つあり内容と密度の濃い授業であったことが考えられる。これは「3領域の関連性はとてもよく理解できたが、内容が濃すぎて非常に疲れた」というような学生の感想にあらわれていた。2つ目は今回の調査用紙の特徴として、昨年度とは異なり、事例を出して経時的に保健・医療・福祉サービスの知識を問うものであった。そのため学生にとっては、回答しにくい質問紙であったことも考えられる。

以上のことから、今回の合同授業の試みは、学生の母性・小児・地域看護学領域の関連性の認識を高めることにはある程度の効果があり、意義があったと示唆された。しかし、経時的な母子の保健・医療サービスの知識の定着については、今後更に、授業の内容・教育効果の測定方法について改善し、継続していく余地があると考えた。

引用文献

- 1) 黒野智子、埴田奈津子、宮谷恵、入江晶子(2002)：母性・小児・地域看護領域の合同授業の試み．聖隷クリストファー看護大学紀要．No.10、149-155
- 2) 今泉洋子．多胎妊娠の管理およびケアに関する研究、多胎妊娠の疫学(1995)：厚生省心身障害研究．5-40
- 3) 田島桂子、澤田秀一他(1997)：新教育課程編成の意図とその展開．聖隷クリストファー看護大学紀要．No.5、135-144